

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

項羽と劉邦—その愛と興亡 完全版

1994年・中国映画・185分

配給/東光徳間

2004 (平成16) 年7月11日鑑賞

<シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004>

Data

監督: 洗杞然 (スティーブン・シン)

総監修: 張藝謀 (チャン・イーモウ)

出演: 鞏俐 (コン・リー) / 呂良偉

(レイ・ロイ) / 張豊毅 (チ

ャン・フォンイー) / 關之琳

(ロムザムド・クアン) /

劉洵 (ラウ・シュン)

👁️👁️ みどころ

あまりにも有名な項羽と劉邦の物語だが、この映画のポイントは、項羽の愛妻の虞姫以上に重要な役割を演ずる劉邦の妻、呂雉の存在。豪気多情に厚い武将、項羽と策謀家で野心を心に秘めた劉邦の二大英雄は、並び立たず! 「四面楚歌」「霸王別姫」の名場面では涙しながら、阿房宮の炎上に象徴される紀元前3世紀における秦の滅亡と漢王朝の創設に至る一大スペクタクルを心ゆくまで楽しみたいものだ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<司馬遼太郎の『項羽と劉邦』とは全く異質の中国モノ>

司馬遼太郎の『項羽と劉邦』は、1980 (昭和55) 年に発表されて、大人気を呼んだ小説。しかし、この映画が描く『項羽と劉邦』は、邦題のサブタイトルに『その愛と興亡』とつけられているように、「愛」の部分にかなりのウエイトをおいて描かれている。もっとも、第1部の中国タイトルは『西楚霸王』というシンプルなもの、西楚霸王である項羽 (呂良偉/レイ・ロイ) をメインに描いた映画。その中国タイトルのとおり、この映画では楚王項羽は、名將を叔父に持つ勇猛な武將だが、同時に人情に厚く、愛妻虞姫 (關之琳/ロムザムド・クアン) にもやさしいという、魅力的な人物。しかし、短気で直情型なところがその欠点。これにひきかえ、劉邦 (張豊毅/チャン・フォンイー) は、単なる官吏の出で、家柄が低いうえ、野心家でどことなく油断のできない人物。しかし、この劉邦には、美人だが夫以上の野心家で才を巡らすのにたけた妻呂雉 (鞏俐/コン・リー) がついている。この呂雉は、項羽の武將としての才能と虞姫を愛する心の深さを知って、これに惹かれていくが、項羽は虞姫一筋のいい男。呂雉の誘いに乗らなかったため、自尊心を傷つけられた (?) 呂雉は、今度は項羽を蹴落として、夫の劉邦に天下を取らせるた

めに画策することに熱中。根が小心者の劉邦も、いつしかこの呂雉の思惑に乗って、いよいよ項羽との対決が本格的焦点に……。そして第2部はいよいよタイトルどおりの『楚漢争覇』。

このように、この映画は、項羽と劉邦、そして虞姫と呂雉という4人の人間模様を中心として、秦を滅ぼした後の天下取りレースをドラマティックに描いた作品。まさに、第1部、第2部を通して日本語タイトルどおり、『項羽と劉邦—その愛と興亡』の大作だ。

<京劇における『霸王別姫』とは?>

この映画でも、項羽の足手まといにならないようにするため、虞姫が自ら命を断つシーンが登場するが、それは最後の契りを交わした寝所においてのこと。つまり、虞姫の側で寝ていた項羽が明け方、手に違和感を感じて目を覚ますと、そこには自ら命を断った虞姫の血が……。というつくり方。『さらば、わが愛／霸王別姫』（93年）の中で、霸王（項羽）の蝶衣（張國榮）と別姫（虞姫）の段小楼（張豊毅）が再三演じる京劇の名場面中の名場面では、2人の別れは、虞姫が項羽の剣を奪って、自らの首を切って命を断つという感動的なシーン。このように場面こそ違っても、項羽と虞姫が演ずる別れのシーンは、観客の涙を誘うもの。そしてまた、項羽の最後の戦いとなった「垓下の戦い」における、あまりにも有名な「四面楚歌」の場面も、この映像で観ると、哀愁をおびた楚歌が何ともいえずいいもので感動的！

<ここでも大女優、鞏俐の登場>

この映画は、杞然（スティーブシ・シン）が監督し、張藝謀（チャン・イーモウ）が製作総指揮をつとめたものだが、ここでも劉邦の妻、呂雉というキー・ウーマンに扮するのは、中国を代表する大女優の鞏俐。項羽と劉邦に兄弟の杯を交換させるタイミングといい、虞姫とかんざしの交換をすることによって姉妹になるという戦略といい、2人の英雄を食ってしまうほどの権謀術策ぶりは並大抵のものではない。項羽を亡ぼして、劉邦が漢王朝を打ち立てた後、劉邦の腹臣の張良は、内部の権力闘争を恐れて早々と引退したため、難を逃れたが、もう1人の腹臣韓信は、劉邦亡き後、漢王朝の実権を握った呂雉によって、失脚させられてしまうことに……。

この映画では、トップに呂雉の名前が挙げられていることからわかるとおり、『項羽と劉邦』というタイトルながら、実はこの呂雉が主役といっても過言ではないほど重要な役。そんな大役を鞏俐が見事に演じているのはさすが！

<項羽役と劉邦役は?>

この映画で、極めて魅力的な人物ながら、悲劇的な最後を遂げる項羽を演じるのは呂良偉。項羽にいつも付き添っている軍師の范增（劉洵／ラウ・シュン）をはじめ、周りの多

くの間人が、「なぜ、そんなことがわからんのやろ?」「なんでそんなことするんや!」と思っても、本人なりの筋を通して、それをやってしまうのがこの人物の長所でもあり、同時に短所となっている。そんな直情型の項羽像を呂良偉が魅力的につくりあげている。

参議院議員選挙が終わった直後の2004年7月11日の今、考えてみれば、ひょっとして小泉純一郎総理は、この項羽とよく似た直情型・・・?

これに対して、ちょっとヒネクレ者の劉邦を演じるのは張豊毅。この張豊毅は『さらば、わが愛／霸王別姫』で、段小楼役を、『始皇帝暗殺』(98年)では荆軻を演じた俳優。張豊毅は、この3つの大役を獲得しただけでも、役者冥利に尽きるというものだ。

<咸陽入りに向けての項羽と劉邦の競争>

当初、圧倒的に優位にあったのは、楚の将軍の項羽。劉邦は項羽と兄弟の杯を交わしながらも、あくまでも項羽の部下の1人にすぎなかった。ところがこんな2人に「競争」をもたらしたのは、楚王から先に秦の都咸陽に入った者を漢中王にするとされたため。結果的に劉邦が先に咸陽に入ったが、これは戦いを避けながらうまく進んで行ったため、逆に項羽が遅れたのは秦の主力軍と決死の戦闘を重ね、これを撃破しながら進んで行ったため。だから先に咸陽に入って呂雉とともに悦に入っていた劉邦は、後から項羽が咸陽に入ってくる段階になって、これはエライことだと青ざめ、急にペコペコと……。こころあたりの駆け引きは実に面白いもの……。

<第1部のハイライトは阿房宮の炎上と虞姫の救出>

『始皇帝暗殺』の映画評論でも書いたように、秦の都咸陽は栄華をうたった巨大な都。そして渭河を隔てて位置していた阿房宮にいたのは始皇帝の亡き後の秦の2世皇帝胡亥(こがい)。この胡亥に、愛妻の虞姫を慰みものにされた呂雉から聞いた項羽は激怒し、阿房宮を火の海にしてしまえと命令。秦が全国から集めた宝物をことごとく燃やしてしまうという暴挙に范増は反対したが、聞く耳をもたない項羽はこれを断行。阿房宮は90日間燃え続けたという。そんな中、虞姫がまた阿房宮の地下牢の中にいることを告げられた項羽は、燃えあがる火の手ももとはせず、ただ一人阿房宮の地下牢の中へ。無鉄砲だが、「男項羽ここにあり!」「愛する虞姫のためなら、たとえ火の中水の中へ!」という実にカッコよく、男らしい行動。阿房宮の外で、じっと事態の推移を見守る劉邦に対して呂雉は、「もし私が同じような目にあったら助けてくれる?」と尋ねるが、劉邦からの明確な返答はなし……。

<阿房宮炎上はウソ?>

もっとも、2003年12月5日付の中国の新華社電及び12月6日付の中国の新聞報道によると、中国社会科学院考古研究所と西安市文物保護考古所が共同で実施した発掘調

査の結果、阿房宮跡に火災の痕跡は発見されなかったとのこと。これによって阿房宮は項羽によって焼き払われたというそれまでの定説は覆されるのだろうか・・・？

＜再三のピンチを切り抜けながら最後に逆転ホームラン！＞

この映画の中に、秦軍と戦う項羽にもピンチはあるものの、それはほんの少しだけ。項羽にとっての本当のピンチは虞姫を秦に奪われた時ぐらいのもの。そしてこれについても劉邦は手助けらしい手助けはしていない。呂雉と虞姫とのかんざしを交換することによる姉妹の約束にしても、その多くは呂雉の計算にもとづくもので、虞姫は純情そのもの。

これに対して劉邦のピンチは実に多い。もっとも、「運も実力のうち！」とはよく言ったもので、劉邦は実にもうまく立ち回ったが、同時に数々の幸運にも助けられながら、このピンチを切り抜けてきた。そしてこれを本当に支えていたのは呂雉。自らおとりとなったり、人質になったり、その活躍ぶりは見事なもの。もっとも呂雉は、項羽の人質となって項羽の身近で生活していたときは、かなり本気で劉邦を見限って、項羽につこうと思っていた様子。しかし項羽には最愛の虞姫がいるため、結果的に項羽からフラれる形になってしまった呂雉は、そのプライドを大きく傷つけられたはず。そしてそれ以降、呂雉のハラは、本当に項羽を倒し、劉邦を皇帝にする方向で固まったようだ。まともに戦えば必ず負ける、といってもよいほど負け続けながら、西楚霸王、項羽の温情によって、中国は東西に分けられ、東は項羽、西は劉邦が治めることになり、劉邦は大満足のはず。ところがこの「和睦」成立後、劉邦の部下の韓信が戻ってくるや、再度劉邦は韓信に命じて項羽軍を不意打ちさせてこれを破り、その後次第に項羽を追いつめていった。そして最後の戦いとなる「垓下」まで項羽を追いつめていったのだが、この「和睦」成立後の韓信による項羽への奇襲は、劉邦が最後に放った逆転ホームランのようなもの。しかしこの映画を観ていると、どんな人物を英雄と呼ぶべきか、ちょっとわからなくなってくるような気がするが・・・。

2004（平成16）年7月13日記